

2006(平成 18)年 3 月 26 日

母校の百周年記念とわが家族史の一端

学部 12 回 吉本信之



2005(平成 17)年 10 月 8 日の百周年記念式典に私は特別な感慨をもって参加した。それは昨年、平成 17 年が長崎高商 19 回卒の父の生誕百年の年であること、経済学部卒の兄弟 3 人が百周年記念式典に揃って参加できることからくる特別な感慨であった。次兄は学部 6 回、私は学部 12 回、弟は学部 15 回である。

私は式典が始まる前に壇上の大きなスクリーンに次々と映し出される創立時からの写真映像に見入った。セピア色の往時の写真は卒業アルバムからのものであるだろう。大正時代のものが多かったように思う。映像を見ながら大正末期の父の学生時代を偲んだ。私は父の卒業アルバムを見ていない。父は大正 15 年 3 月高商卒業後、すぐに朝鮮に渡り、朝鮮金融組合・楊市(現在 北朝鮮 平安北道 龍川)に赴任した。その後平安北道内の義州、中江鎮を転任し、終戦時は参禮(現在 韓国 全羅北道)であった。昭和 20 年秋に家族 8 人で引揚げの時、すべての家財道具は(アルバム類も含め)そのまま置いてきたそうだ。一家は父、母の郷里である長崎・大村に引揚げた後、父は 7 年後の昭和 27 年暮れに 48 歳の若さで病死した。私が小学 6 年の時であった。そのため父から高商時代の話しを聞く機会はなかった。

一昨年、私は母校の百周年と父の生誕百年とを関連づけて、長崎高商、朝鮮金融組合についていろいろ調べ、資料や本を集めていた。昨年 6 月瓊林会大阪支部総会に出席したとき珍しいものが目についた。受付のテーブルの端に一冊の分厚いアルバムが置いてあった。それは高商 17 回生(大正 13 年 3 月卒)の卒業アルバムであった。父の 2 年先輩のアルバムである。当時の教授、校舎、授業風景、運動部、文化部、西山周辺、街中風景など多くの写真が載っている。父の高商時代もこのようなものだったのだろうとこのアルバムで知ることができた。大正デモクラシーのよき時代の学生生活だったのではないかと思う。この卒業アルバムは 17 回卒のご遺族の方が瓊林会大阪支部事務局に寄贈されたものだそうである。事務局の栗津先輩にお願いしてこの 83 年前の古いアルバムをお借りしている。兄弟たちに見せようと思って。

百周年記念式典の翌日、学部卒の兄弟 3 人は妻たち同伴で長崎市郊外のホテルで昼食会をもった。3 人とも既に 60 歳を超え会社生活の第一線を引いている。これまで母校の 70 周年、80 周年、90 周年に 3 人が集まることはなかった。今回は母校の百周年と父の生誕百年ということで集まった。私はこの日、私がこの 1, 2 年で集めた資料、本の中から 2 冊を持参した。

一冊は昭和 3 年発行の『長崎高商同窓会 会員名簿』である。明治 41 年卒の第 1 回生から昭和 3 年卒の第 21 回生までの名簿である。第 1 回生も昭和 3 年当時は 41、2 歳の働き盛

り、第 21 回生は卒業したばかりの 20 歳くらいである。総勢 2500 名の先輩たちの勤務先、住所が分かる。うち約 400 名は海外（外地）勤務であり、同窓会の海外（外地）支部も数多くある。彼等の多くは朝鮮、満州、支那、台湾に夢を求めて渡ったことであろう。父の名は 19 回生のなかにあり、勤務地は朝鮮金融組合、楊市とある。次兄の勤務先であった十八銀行の先輩方の名前、さらには弟の妻の親族の名前などもこの古い名簿で確認することができた。

昼食会に持参したもう一冊の本は『湖南の日本人』という本である。湖南というのは朝鮮の全州・群山・裡里あたりの平野部を指す。著者 古川 昭 氏は朝鮮開港史叢書 3 としてこの本を昨年発行された。私は福田 泰 先輩（現在瓊林会大阪支部 成隣会幹事、高商 38 回）からこの本の紹介を受けた。すぐに岡山市在住の古川氏から直接購入し、東京にいる長兄に送った。福田先輩は朝鮮全州南中学卒、私の長兄も全州南中学（1 年の 8 月まで）であるので、福田先輩は私の長兄の先輩でもある。私がこのことを知ったのは一昨年の瓊林会大阪支部総会に出席した時であった。出席者名簿に出身高校、出身中学が記されていて、それで福田先輩が全州南中学卒ということを知ったのである。このときの支部総会の懇親会で福田先輩にお願いし成隣会に入れて頂きそれから毎月の例会に出席させて頂いている。上記『湖南の日本人』を長兄に送ったあと、思いがけないドラマが生れた。長兄はこの本のなかで紹介されている A 氏の自分史の引用が目についた。この A 氏が長兄と全州南中学の同級生だったのである。終戦の年の 8 月まで中学 1 年のとき隣り同士の席だったそうである。こうして 2 人は戦後 60 年振りに連絡を取りあうことができるようになったのである。こういう経緯をこの日の昼食会で話した。

この 1 , 2 年で私が集めた長崎高商関連の本には、伊東勇太郎教授の『英文学の道程』昭和 7 年刊がある。伊東教授には父が習い、次兄も私も習った。若かりし頃の伊東教授の英文学に関する著作ではあるが英文学のみならず、広く中国の古典、日本の古典、禅などについても造詣深く格調の高い著書である。

朝鮮金融組合関連で集めた本のなかでひとつだけ挙げておきたい。重松麟修（まさなお）氏の『朝鮮農村物語』昭和 16 年刊 である。重松氏は朝鮮金融組合のある地方（現在の北朝鮮）の組合理事として農村の振興、農民の自力更生に全身全霊を打ち込まれた。特に副業として養鶏を奨励し、「卵から豚へ、牛へ、土地へ」のスローガンのもと勤儉・貯蓄を実践・指導された。その愛と真心からの熱き指導ぶりが『朝鮮農村物語』で読み取れる。感銘するところ多し、落涙するところ多しの本である。私が引き続き調べているのは重松氏が終戦後無事に引揚げられたかどうかということである。朝鮮時代に活躍した人で、語り継ぐに値する人格者の一人であると私は尊敬している。

以上母校百周年に関連し私の父のこと、兄弟のことを含め家族史の一端としてまとめてみた。

なにか関連情報があればご教示頂きたい。